

早稲田大学総長 殿

2010年7月4日

所属 商学学院
資格 教授
氏名 嶋村 紘輝 印

特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題：ニュー・ケインジアン経済学の最近の動向
2. 研究期間：2008年3月27日～2008年9月9日
3. 研究場所(国/都市・機関名)：イギリス・オックスフォード大学
4. 研究成果概要(2,000字以内)：

当報告者は、『早稲田商学』に掲載された2つの論文「マクロ経済学の発展—古典派とケインジアン—」(2004年9月)、『続・マクロ経済学の発展—新しい古典派とニュー・ケインジアン—』(2006年3月)において、1930年代後半から現在に至るマクロ経済学の発展を跡付けた。その際、主として景気循環の問題に注目し、古典派とケインジアンのマクロ経済学、および新しい古典派とニュー・ケインジアンのマクロ経済学を対比・検討しながら、古典派経済学とケインズ経済学のそれぞれの特徴と、両者を画する相違点を明らかにした。

しかしながら、最近の(1990年代後半から2000年代における)マクロ経済学の動向については、十分に研究・調査が及ばなかった。とりわけ、最近のニュー・ケインジアン経済学の動向について更なる研究・調査を進めて、新たな論文としたいとの思いが強く残った。

最近のマクロ経済学に関して、たとえばDe Long(2000)は、「今日のニュー・ケインジアン経済学の綱領は、その大半はマネタリズムから発展したものである」と主張している。また、鶴飼・鎌田(2004)は、「IS曲線、フィリップス曲線、金融政策ルールの枠組みからなるニュー・ケインジアン経済学と呼ばれるマネタリー・エコノミクスの一分野が、欧米の学会を中心に急速な発展を遂げている」と述べている。さらに、ニュー・ケインジアン型フィリップス曲線の理論・実証研究が、内外で盛んに行われている。以上のような見解・動きからして、一体、ニュー・ケインジアン経済学は最近どのような姿に変わったのか、そして、どのような方向に進みつつあるのかを、正確に把握すると同時に理解を深めることが、今回の主な研究目的であった。

在外期間中は、オックスフォード大学ウォルフソン・カレッジに、コモンルーム・メンバーとして受け容れてもらい、カレッジ正門前のフラットにずっと滞在して、心置きなく研究を続けた。ここは、1993～94年の1年間、長期在外研究の生活を送った地であり、また、その後も何度か短期訪問をしていたので、第2の心の故郷のように思え、すぐに落ち着いて研究生活を始めることができた。

第1に、Brian Snowden and Howard R. Vane, *Modern Macroeconomics: Its Origins, Development and Current State*, Edward Elgar, 2005に日夜取り組んだ。本書は報告者の博士学位論文とほぼ同一のテーマを扱っており、ニュー・ケインジアン経済学を含め、現代マクロ経済学の発展の系譜と現況を詳細かつ厳密に論じた、類を見ない貴重な文献である。本書を通じて、古典派・ケインジアン・

